



Title	パラグアイ文学の再評価
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	Estudios Hispánicos. 1983, 8, p. 53-65
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/93609">https://hdl.handle.net/11094/93609</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## パラグアイ文学の再評価

吉 田 秀 太 郎

### はじめに

ガブリエル・カサクシア (Gabriel Casaccia 1907-) の「なめくじ」 (*La Babosa* 1952) をはじめとする一連の小説とアウグスト・ロア＝バストス (Augusto Roa Bastos 1917-) の「汝、人の子よ」 (*Hijo de hombre*, 196), 「余は最高権者なり」 (*Yo el supremo*, 1974) などの作品の出現によって、現代パラグアイの文学に対する関心が最近高まってきている。カサクシアの作品「なめくじ」はフランス語に翻訳され好評を得たし、ロアの「汝、人の子よ」もイスマノアメリカだけでなく広く欧米に紹介され、高い評価を得ている。このようにして、パラグアイの現代文学は1950年頃を境として、急速に変貌を遂げつつある。このことは、この国の文学に対する再評価のときが来たことを告げるものである。それと言うのも、イスマノアメリカの文学史に占めるパラグアイの位置は、従来、卒直に言って決して重要なものではなかったからである。少なくとも、この国の文学に関する限り、知られざる部分が余りにも多かった。そもそも植民地時代には、文化の中心はヌエバ・エスパーニャの首都メキシコ市とペルーの首都リマであり、その他の地域は、言わば文化的辺境だったわけである。だが、19世紀初頭から約半世紀続いたロマン主義は、アルゼンチンをはじめとして、キューバ、ウルグアイ、エクアドル、コロンビアなど、イスマノアメリカの各地で開花し、多くの著名な詩人や作家が現われたが、パラグアイの文人の名はほとんど知られていない。19世紀末の近代主義のはなやかだった時代にも、キューバ、メキシコ、ニカラグア、コロンビア、アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、ペルー、ベネズエラ、ボリビアなどに関する記述はあっても、パラグアイの名は見つからない。スペインの文芸批評家ギジェルモ・デ・トーレは、イスマノアメリカ文学の特色の一つとして、それぞれの国の作家たちが互に孤立した状態にあることを指摘し、あ

る国の著名な作家が、隣国を訪問した際、自分の名前の余りにも知られていないことに憤慨した例を挙げている。<sup>1)</sup> 確かにこうした現象はごく最近まで見られた。しかし、それにしても、パラグアイのこうした孤立ぶりは普通ではなかったように思える。ある文学者の指摘するように、これには、パラグアイ国内における文芸批評だけでなく、イスパノアメリカや欧米の文芸批評が、これまでどちらかと言えば表層的な研究を行ったに過ぎなかったという事実が作用していることも確かであろう。<sup>2)</sup> これについてはあとでもう少し触れてみたい。それなら、パラグアイの文学は果して従来不当な評価をされてきたのであろうか。パラグアイの新進批評家フランシスコ・ペレス・マルセビッチは『パラグアイの詩と小説』の序で、自分は学校でわが国にはすぐれた作家がいると教えられ、そこでその作家たちの作品に接しようとしたが、見つからなかった」と述べているし、<sup>3)</sup> ホセフィーナ・プラーも『パラグアイ文化の諸相』の中で、パラグアイ文学は過去を持たない文学であるという意見を述べている。<sup>4)</sup> つまり、国内の批評も、この点では厳しい評価を下しているのである。ではなぜ、4世紀に及ぶこのような状態が続いたのであろうか。さまざまな要因が考えられる中で、最も重要なのは、この国の歴史と政治であると考えてよいだろう。ロケ・バジェーホスが『国の現実の表現としての文学』と題する著作の中で、パラグアイの歴史が、国民に生きることをではなく、死ぬことを教えたと述べていることは極めて鋭い指摘であると言えるだろう。<sup>5)</sup> 彼はまた、この国に、重大な政治上のミスを犯すことなく国民を指導する人材の欠如をも挙げている。いま、簡単にパラグアイの歴史をふり返ってみると、初期の発見と征服の時代には、**Provincia Gigante de Indias** と呼ばれていたことからわかるように、広大な地域に亘っていた。1617年、スペイン国王はこの地の分割を命じ、結局、パラグアイは海への出口も主要な部市へもの出口をも失うことになる。そのときから、河川を利用する以外、大西洋への出口を失い海岸を有するイスパノアメリカ諸外国と較べて、孤立した不利な状況に追いこまれた。(ホセフィーナ・プラーはこれを海外の文物の流入を妨げる要因と考えたが、ロケ・バジェーホスは地理学的な条件は二義的であると考えている。)

1617年の勅令により、アスンシオンがラプラタ地域の中心都市としての地位を失い、従ってブエノス・アイレス、サンタ・フェ、コリエンテス、

コンセプションなどの諸都市とのつながりもなくなった。そうすると、全く独自の経済力に頼らざるを得ず、しかも国は大部分が原始的な農業で、鉱山などの天然資源にも恵まれていなかったから、スペイン国王としても生産性に乏しい土地を重要視するはずはなかった。<sup>6)</sup>

経済的な基盤のゆるさが、パラグアイの生活を族長的な田園生活に限定し、それによって人口の増加、社会生活の成長、芸能文化の発展を、300年間にわたり、阻害してきた。

今日もなおその後遺症が、その間におこった内戦や外国との戦争の傷跡と共に、経済、社会の面で見られるのである。こうした時代錯誤的な経済構造は近代社会の中で生きてゆく上での多くの困難を生じ、これが国家としての様々な活動にとって、その発展を妨げた。文化的な活動、そしてその具体的な表明の一つである文学活動もやはり例外ではなかった。

言うまでもなく、文学と最も密接な要素の一つは言語である。パラグアイは、アメリカ大陸の中でも土着の言語的遺産が土着民の数の減少にもかかわらず、ヨーロッパの征服民族の押しつけた言語と共存しているという珍しい国の一つなのである。1550年、カルロス5世は土着の人たちにスペイン語を教えるべく学校を設けるよう命じたのであったが、そしてまた1634年と1636年にはフェリペ3世がインディオたちへのスペイン語教育を義務づけたにもかかわらず、この企ては失敗に帰した。この国ではグアラニー語が布教活動において支配的であったし日常生活一般においても用いられ続けた。やがてイエズス会による宗教的支配下に置かれたことが、事態を決定的なものにした。イエズス会は神の大いなる栄光にかくれて、政治的な野心を燃やしていた。そして、スペイン帝国から独立しようとする密かな望みを抱いてこの植民地の奥地に一種の神政による帝国を作るに至ったのである。その *Reducciones* (これは、封土に住む人たちにつけられた意義深い名称である) の中で、インディオたちに白人と接触することを避けさせ、そのためにその最も強力なコミュニケーションの手段たる言語を学ばせなかった。そして常に土着のグアラニー語をそのまま保存させた。<sup>7)</sup> こうして、パラグアイにおける土着語はスペイン語と4世紀の間共存状態にあったのであるが、1967年8月15日付の新憲法の下で、公用語として認められるに至ったのである。

この2カ国語併用は、歴史学と言語学の分野で深刻な問題を提起してい

る。しかし、いま明らかにしておきたいことは、それが文学の仕事にどう影響を及ぼしているか、ということである。この点についてロア・バストスはいみじくも次のように述べている。

「パラグアイには明らかな一つの文学がある。すなわちスペイン語の鑄型の中でいびつな形で発展してきた文学である……。だが、この国民文学のルーツは……ただ、その歴史的現実及びその環境で結ばれている国民だけがそれを感じ、自ら土着の言語という臍の緒での中にそれを聞くことができる。従ってスペイン語で詩や小説を書く人は、集団としての生きざまのあの最も豊かな、そして最も生き生きとしたもう一つの部分を翻訳しているか、せいぜい解釈しているに過ぎないのだ。集団的生の最も豊かな部分は、それが生まれた瞬間、閉そくされ、制音状態におかれるのだ。自己表現のために闘っているパラグアイ文化のドラマは、精神的孤立のドラマに他ならず、土着の言語を保護すると同時に制限するという特色を備えている。こうして、パラグアイは文学的な面で、アメリカの兄弟国にとって未公開の国となったのである。」<sup>8)</sup>

エルビオ・ロメロもかつてあるインタビューで、パラグアイ人にとって自分を最もよく表現できることばはグアラニー語であり、グアラニー語こそは文学全体に糧を与え、また民謡の大部分を育ててきた言語である、と述べている。

こうした見解に従えば、パラグアイにおけるスペインの流れは、この国民が土着の言語で感じ示すものを同化し翻訳しようとする積極的な試みに他ならないことになる。

こうした2つの言語の長期に亘る併存の結果として、言語学上の混血が生じたことは避け難いことであった。これはロア＝バストスによれば、文学的な見地から豊かさを増すことになるどころか、スペイン語のグアラニー語化およびその逆の現象の増加によって、方言的退廃の過程となってかえってマイナスの効果をもたすものである。これに反してロケ・バジェーホスは、これはもしかして両表現手段の間の決定的な妥協という救いのしるしではなからうかと考えている。とはいえ、「しかるべき解決は、ただ文学作品を通じてのみ可能であろう」と彼は考える。注目すべきことは、彼

が例の著作の中で、カルロス・ビジャグラ・マルサールの小説『マンクエージョとしゃこ』(1965)を取り上げて、この作品がグアラニー語で構想されたもののスペイン語訳に他ならないと指摘していることである。ロア＝バストスの場合、これらの言語に共通の情緒的内容を与えることによって両者の隔りを縮めようとしたいわば開拓者的存在と言える。

以上パラグアイの歴史、社会的要因(もちろんこれには地理的、社会的、経済的要因とも多少なりとも関りがあるが、)について観察したわけだが、独立時代から現代にかけて、特にその歴史的、政治的要因がこの国の *proceso de erosión* と依存的な地位に大きなウェイトを占めていることは強調されねばならない。

1811年の独立の年から1862年にかけて2つの長い独裁政治があり、3人目の独裁者は悲劇的な最後を遂げたが、結局独裁制は1870年まで続いた。もっともこうした状況は必ずしもこの国に限られたものではなく、むしろ、19世紀の大半はイスパノアメリカのほとんどの国に見られた現象であって、文学におけるロマン主義の特色も、そうした独裁制との闘いにあったことは周知の通りである。中南米における独裁制の原因は、独立当初にあっては為政者の経験不足、更に苛酷な大自然、その中で生きるための力の信奉、教育の不徹底、など色々考えられるが、いまはパラグアイの現実に目を戻そう。

ホセ・ガスパール・デ・フランシアはたしかにパラグアイの独立の擁護者だったが、その反面、文化を拒みつづけ、この国を陸の孤島にしてしまった。このことは地理学的・経済的・言語的な要因を合わせたよりももっと深刻だった。1862年まで続いたカルロス・アントニオ・ロペス政権のあとに、いわゆる3国同盟戦争(1864—1870)があり、これによってパラグアイは疲弊の極みに達した。侵略者たちが引揚げたあとも、無政府状態が続いたが、何よりも国家としての誇りが、踏みにじられてしまったのであった。やがて、コロラド党と自由党の二つが生まれる。前者はフランシスコ・ソラノ・ロペスの信奉者である。この二つの政党の党利党略のために、国の回復はおくれ、国民生活を保証すべき諸々の制度がしばしばその機能を失った。国民の不安と不満はつのも、瀕発する暴動を軍隊が鎮圧した。軍部が常に国権を掌握していたわけである。こうした状況下であって、その後の世代の作家たちは無意識裏の自己防衛のためか、その代償を、歴史

物とか歴史文学の開拓の中に探し求めたが、そうした作品は結果としてやたらと自国のイメージを理想化したものになった。こうした傾向は慢性化して今世紀の前半まで続くのである。

最初の国際紛争の傷跡がいえ切っていないときに、パラグアイはボリビアとチャコ戦争（1932—1935）を交えねばならなかった。この戦で、パラグアイは辛うじて勝利を収めた。文学的感受性における変化の基礎が、この歴史上のできごとによって固められようとしていた時期に、そして、旧体制に対する見なおしや変革が試みられようとしていた矢先にラファエル・フランコ大佐によるクーデターがおこり、すでにある2つの政党の間の争いに加えて、新しい政党、2月党の争いがおこった。その後、1947年には北部の都市コンセプションで内戦が発生し、その直接の結果の一つとして、大規模な集団新住がおこった。チャコ戦争後の刷新運動に大きな貢献をした幾人かの知識人もその中に含まれていた。

1954年の8月15日にはアルフレド・ストローエスネルが軍事政権を樹立、今日に至っていることは周知の通りである。

要するに、独立から今日に至るパラグアイの歴史、つまり約170年のうち、80年以上が4人の独裁者によって支配されたわけであり、残りの90年は、泡沫的な、不安定な政権によって継承された。いわゆる立憲時代(1870)からストローエスネル時代の開始の年(1954)までに47人の大統領が現われては消えたことがその事実を何よりもよく物語っている。<sup>9)</sup>

近年この国の文芸批評は、パラグアイの文学的伝統の欠如をしきりに指摘しているが、その理由が、実はこうした逆境の連続という悲しむべき現実にあったことは明白である。外国の文芸批評がこの国の文学に従来余り注目することのなかった理由の一端もここにある。

チャコ戦争以後のこの国の独裁制の中で、その制度そのものに内在する制限がもたらしているものは明らかだ。価値のある文学作品の数の少なさが何よりもその結果を物語っている。言うまでもなく、言論の自由が想像を絶するほどに封じられているからである。特に最近の30数年間は著しく、作家たちは一種の精神的亡命の状態におかれている。イギリスの文芸批評家J・フランコは作家と国状について述べているが、その中でパラグアイに言及し、次のように要約している。

「パラグアイには相次ぐ独裁制しかなかった……。作家は欲求不満という蛇の生殺しのようなさいなみや、望む通りに書く自由の欠如や、呆然とするような知的環境に苦しむ……。しかしこうした最初の苦悩はやがて独裁者の意志と争うことになる場合もあるが大ていの場合、周囲の環境に押しつぶされてしまう。そうした敗北を描いたのがパラグアイの小説家ガブリエル・カサクシア（1907—）の作品「なめくじ」(*La babosa*, 1952)である。この中で彼は、パラグアイの辺地のある村で、1人の作家が次第に墮落してゆく過程を追っている。主人公は貧しい環境の出身で、大学時代に1冊の詩集を出したことがあるが、ある裕福な弁護士の娘と結婚し、物を書く暇ができる。しかし彼は、この村の知的な孤立と、村びとたちのみじめな生活に対して立ち上がることができない。そして逆に彼は下劣な飲んだくれになり下ってしまう。

このような知的な隔離は、小さな村々や、さらにはラテン・アメリカ全体にわたる生活の特徴であるが、独裁制の下にあっては、政治的な抑圧の時期を通じて不可避免的に生じる外界との絶縁によって、この状態は一そう深刻化する。従って、そうした地域の知識人は、国外の文芸思潮について情報を入手するのがおくれ、それを吸収するのはさらに遅い。また、彼らはしばしば旅行を断念させられるために、他の地方ではすでに廃れている思想の中に閉じこもったままである。たとえば、パラグアイではロマン主義は世紀の変り目においてもなお文学思潮の主流をなしていたし、近代主義が支配的になったのは、何と雑誌 *Juventud* の現われた1923年のことであつた。<sup>10)</sup>

イスパノ・アメリカの他の国ではおしなべてロマン主義がほぼ半世紀にわたって支配的だったことは知られているからその開始が1830年代のはじめだったことを思うと、J・フランコの指摘する事実は興味深い。心ある作家たちは、自発的に亡命の道を選んだ。亡命先は主としてアルゼンチンである。ウルグアイの作家たちもしばしばアルゼンチンに出かけているが、事情はやや異なるようである。つまり、より多くの読者層に知られることを何よりの目的としているのが常である。パラグアイの自主亡命者たちの活躍によって、国内では期待できなかった赤裸々な、修辞抜きの文学の出現が可能となり、従って、パラグアイ文学の刷新が外部から行われるという結果になった。

国内においては、まじめな作品を書こうとする作家にとってとりわけ大きな問題は、そのための場が必ずしも確保されていないことである。経済的な能力によることはもちろんあるが、それにも増して、出版社の側での、ソロバンを抜きにした、大きな視野に立った出版活動にいまひとつ理解がなかったことが挙げられる。と同時に、パラグアイにはまだ、十分な読者層が形成されていないために、折角書物が刊行されても売れないという問題がある。このことについては、別な個所でかって述べたことがあるが、ラテンアメリカ小説のブームがおこる前の、今世紀前半の新大陸ではよく見られた現象である。因みにホセ・アントニオ・ビルバオ氏の「書籍と作者」と題する論文の1部に次のような文章がある。1966年に書かれたものである。

「1冊が1日分の給料に匹敵する400ないし500グアラニーもする本をナイトテーブルの上に置けない人は多い。毎日の食事を確保せねばならないとき『汝、人の子よ』とか『古傷』ほどの小説は、労働者や給料の少ないサラリーマンの机には見つからない、が30グアラニーそこそこの安物の雑誌がパンフレット、ないしリーダーズ・ダイジェストの最新号程度なら手にはいるだろう。」

読者層の薄さと悪循環をなすのが本の価格の高さである。上に見たような現象は程度の差こそあれ、イスマノアメリカのどこの国にも見られる。筆者は数年前、中南米の数カ国を訪れたが、知識人の歎きはどこの国でも同じだった。apagón cultural という見出しでこの問題を扱っている新聞もあった。

いま一つ、パラグアイの文学の発展を阻害したものに国内における文芸批評の在り方がある。本論の冒頭近くで部分的に言及したが、この批評がおしなべて馴れ合い的であり、真に価値のあるものとそうでないものを見極めなかったことが大きな影響を及ぼしたことは間違いない。彼らは大旨、作品よりも作者の方に重点を置いた批評を好み、従って彼らの編んだ文学史は、フスト・パストール・ベニーテスも言うように、文学史というよりも人物画集の感があった。<sup>11)</sup> こうした過去の批評に対する一種の反動として、これを厳しく批判する新しい世代の批評家たちが生まれてきてい

るが、彼ら自身の水準はまだ文学研究の現状が求める科学的な厳格さに達していない。

要するに、パラグアイは、歴史的にも政治的にも、独立以来、つねに苦難に遭遇していたわけで、文学もその影響から免れることはできなかつたわけである。空想の産物たる文学作品を書くという仕事は、この国では必ずしも無くてはならぬものではなく、従って勢い文学活動は一部の人間の趣味ないし、書誌学上の好奇心を満足させる程度のものとなるか、あるいはごく限られた特権階級だけのものとならざるを得なかつた。

### 歴史的な現実

ペレス・マリセビッチの言うように「厳密に言ってパラグアイにはイスパノアメリカに共通する文学上の諸流派の存在を云々することは不可能である。あるのはただ、時期おくれの近代主義やリアリズムの場合におけるように、汚染されたもの、かすかに反映されたもの、いびつな企てだけである」<sup>12)</sup>とすれば、パラグアイ文学の構造を分析しようとする試みも、学校教育のためならいざ知らず、ばかげたものと言わねばならないし、としながらも、フランシスコ・E・フェイトは、ルベン・バレイロ・サギエールの分類を借りて、パラグアイ文学を、時代的に次の4つに分けている。<sup>13)</sup>

1. 最初から1878年までの文学先史
2. Colegio Nacional と Instituto Paraguayo の世代 (1878—1913)
3. 近代主義とチャコ防衛 (1913—1935)
4. 穏健で普遍性を追求する前衛運動 (1935年から今日に至る)

このうちの最初の2時期はその歴史的、政治的背景からして、暗い印象を与えている。第3の時期も、その前の世代の踏襲に近いが、ただ、その中に特筆すべき若干の文学上のできごとがあった。まず、1889年から1898年の間に生まれた作家たちで、その特色は高踏派的、象徴派的であって、1913年に創刊された雑誌「クロニカ」のグループに属している。この時期にパラグアイの演劇や小説に見るべきものが現われた。更に1900年から1908年の間に生まれた作家たちのグループがある。1923年に創刊された雑誌「フベントゥ」が彼らの機関誌とも言うべきもので、このグループによって、おそまきながら、この国に近代主義が導入された。最初のグループが Colegio Nacional で教育を受けたのに対して後者のグループは Colegio

San José の出身者であった。

いちばん新しい世代はチャコ戦争の結果として生まれたわけであるが、文学の刷新の兆しがこの頃になってはじめて現われた。作家たちは従来の立ちおくれを認識し、それを取り戻す火急の必要性を感じた。この世代は、純粹に詩的な面での3つのグループを生み出すことになるのだが、他のジャンルにも同時に刺激を与えることになる。その3つのグループとは、1940年代の Vy'á raity (喜びの巢) を中心とするグループ、1950年代の Facultad de Filosofía と Academia Universitaria に所属する若手グループ、(Alcor 誌を中心に集っていた)、Diálogos 誌や Asedios 誌を中心に活動している1960年代の最も新しい作家たちである。

以上、パラグアイ文学の主要な流れとその方向が明らかになったところで、具体的なジャンルとしての小説についてその現実と問題点をしてみよう。

## 歴史と小説

一般に、イスマノアメリカにおける本格的な小説の出現は1816年に発表されたメキシコ人ホセ・ホアキン・フェルナンデス・デ・リサルディの「ひぜんかきのおうむ」をもってその最初とされている。もっとも、それ以前にも、ペルーのカルロス・シグエンサ・イ・ゴンゴラの「アロンソ・ラミレスの不運」(1683) とか、カリオー・デ・ラ・バンデラの「盲人旅行者の手引き」(1773) とか、ヌーニェス・デ・ピネダの「愉しかりし俘虜生活」(1673) など先駆的な作品もあったこと、更にはインカ、ガルシラーソ・デ・ラ・ベガの「インカ王統記」(1609—1617) の中にも短篇小説の先駆を思わせるものがあることは周知の通りであるが、パラグアイにおいても、つとにフィクションの先がけと見なされる作品のあったことは余り知られていないようである。アスンシオン生まれの混血の年代記作者で、パラグアイの史料編集の父と仰がれているルイ・ディアス・デ・グズマンの書いた『ラ・アルヘンティーナ』(1612) が問題の作品であり、パラグアイ征服の模様を記したこの年代記の中に、すでに小説を思わせる個所があるとして、ルシア・ミランダのエピソードが挙げられている。

しかし、その後長年の間、パラグアイには小説が現われなかった。他のイスマノアメリカ諸国で小説が現われはじめた頃も、この国が、他の兄弟

国がかって経験したことの無いほど悲惨な戦いの後遺症とも言うべきものに苦しんでいた。3国同盟戦争後の2つの世代は、ジャーナリズムや雄弁や料史編集の面で見るとべき活動を行ったが、空想の作品を書く人は現われなかった。またその読者もいなかった。ペレス・マリセビッチはこの当時の状況について大略次のように述べている。すなわち、パラグアイは2度にわたって小説家の世代を生み出すはずであったが、つまり最初は、19世紀の後半で、2番目は今世紀の前半だが、その2度ともその努力は空しかった。パラグアイにおけるフィクションの草分け的存在となるはずだったあの時期は3国同盟戦争の煽りで見ごとに消え失せてしまった……。こうして、パラグアイの悲劇的な19世紀は、900年代の世代と呼ばれる人たちの放つ曙光に照らされながら去ってゆくのである。900年代の人たちは、過去の神話の中に没頭し、政治の埃にまみれて虚構の世界への関心を全く失い、彼らのもつ空想力を、無意識のうちに、史料編集という建物の構築に注ぐことになる。このことから彼らの努力は歴史の虚構化と虚構の歴史化というパラドックスを生むことになるのだ。歴史家と法律家ばかりの国パラグアイはかたくなに史料編集と文学とを混同し続け、CrónicaやJuventudに群がっていた素朴な作家たち、苦悩し、方向を失った作家たちを惨めにも犬死にさせてしまったのだ。<sup>14)</sup>

奇妙なことに、パラグアイの小説の創始者は3人の外国人だった。ホセ・ロドリゲス＝アルカラー(1875—1958)とマルティン・デ・ゴイコチエア・メンデス(1875—1916)はアルゼンチン人で、ラファエル・バレット(1775—1910)はスペイン人だった。

パラグアイにおける小説は時期が遅れていた上に、国の歴史的な過去を強調することに重点が置かれ、しかも質量共に貧弱だった。この状態が1900年から1950年過ぎまでの間続いたのである。ここに至ってはじめて2人のすぐれた小説家の出現を見るに至るわけである。つまりガブリエル・カサクシアとアウグスト・ロア＝バストスが従来の地方的な小説を一挙に普遍的なものへと引き出した。この2人の活躍によって、パラグアイは今までの未知の国から明るみに出されたのである。この2人に共通しているのは、共にアルゼンチンで作品を発表したことであると同時に、共に根っからのパラグアイ人で、祖国の現実を理想化しようとする国内の風潮に反対している点にある。カサクシアは『マリオ・パレダ』(1939)、『なめく

じ』(1952), 『古傷』(1964), 『亡命者たち』(1966), 『後継者たち』(1975) などの小説のほか, 短篇小説集『井戸』(1947) も発表している。彼の『なめくじ』は国内では国のイメージを損うものとして一時批判を浴びた。何しろ英雄崇拜の国に『なめくじ』によって代表される反英雄たちが登場したものであるから, 批判されたのも無理はない。ペルーのバルガス＝ジョサの『都会と犬っころ』の出版されたときのエピソードが思い出される。カサクシアは, その作品, なかでも『なめくじ』, 『古傷』, 『亡命者たち』の中で, パラグアイの Coyguá と呼ばれるタイプの人間を痛烈に風刺している。このタイプの人間は大学や政界をはじめ, 人々の集まるところに必ずいる。出世主義者だが他力本願で, 怠け者である。アウグスト・ロア＝バストスの場合も, パラグアイに対する関心が強い。代表作「汝、人の子よ」(196) と「余は最高権者なり」(1974) 及び「葉かげの雷鳴」(1953) などの短篇集を見れば, このことは明白である。ウゴ・ロドリゲス＝アルカラーはロアを評して, 左翼の人道主義者であり, 純粋なモラリストではない, と述べている。人道主義者の立場から見たとき, パラグアイは一大抑留所の観を呈している。短篇集『大虐殺』(1969) の中の「はちどり」に登場する人物の1人に, 自分たちの国を「広大で陰気な溝であり, そこにはびこるのは陰謀という虫どもだけである。それはまた, 世界という樹皮に見られる小さく不毛なひびであり, そこでは生も死も何ら実を結ぶことがない」と言わしめている。

カサクシアは彼の崇拜するピオ・バローハと同様, 反修辭派の作家である。ロアは詩人としてデビューしたこともあって, 小説においても, 特に初期の短篇小説では, 詩人らしさが強く出ており, これが実は短篇としての評価にかえてマイナスになっている場合もある。しかし次第に文体にしぶ味を加えてきた。ただ, カサクシアの場合とは違って, 文章が洗練されている。二人の現代作家の比較研究はこの国の文学の現時点における水準と方向を知る上で極めて有益であると考えられる。

パラグアイ文学における新しい方向づけが, これらの作家の出現を契機としてなされはじめたことは, 極めて歓迎すべき現象である。これと呼応するかのよう, 国内でも最近出版活動への意欲が高まってきている。その具体的な現れがNAPA社に見られる。1980年に出たファン・パウティスタ・リバララ・マットの Karai Réi oha' äramo guare tuka' ekañy

(王様がかくれんぼうをしたとき) やタデオ・サラテアの Kalaito Pombero など、グアラニー語で書かれた小説をはじめとして、現在までに、25冊の新しいパラグアイ作家の作品がシリーズものとして出ている。La República 社も同様に、ミゲル・アンヘル・カバジェロの詩集「空の果」などを出して積局的な態度を見せている。こうして、パラグアイの文学が着実に、より多くの読者に親しまれるようになっていくことは間違いないように思われる。パラグアイ文学の再評価はすでに始まっていると言ってよいだろう。

## 注

- 1) Guillermo de Torre: *Claves de la literatura hispanoamericana*, Tanrus, Madrid, 1959
- 2) Francisco E. Feito: *El Paraguay en la obra de Gabriel Casaccia*, Fernando Garía Gambeiro, Bs. As., 1977.
- 3) Francisco Pérez Maricevich, *La poesía y la narrativa en el Paraguay*, Asunción, Editorial del Centenario, S.R.L., 1969, 9.
- 4) Josefina Plá: *Cuadernos Americanos*, I, enero-febrero 1962, 68)
- 5) Roque Vallejós, *La literatura paragnaya como expresión de la realidad nacional*, Asunción, Editorial Don Bosco, 1967, 29
- 6) Ebraim Cardoso: *Breve historia del Paraguay*, Bs. As., Editorial Universitaria, 1965.
- 7) Efraím Cardors: *Apuntes de historia cultural del Paraguay*, I, Asunción, Colegio San José, s/f.
- 8) Augusto Roa Bastos: 'Pasión y expresión de la literatura paraguaya', *Universidad*, 44, abril-junio, 1960.
- 9) Francisco E. Feito, *Op. cit.*, 15.
- 10) J・フランコ:「ラテン・アメリカ文化と文学 一苦悩する知識人一」289~290 吉田秀太郎訳 新世界社 1974.
- 11) Justo Pastor Benítez, *El solar guaraní*, Asunción-Buenos Aires, 1959.
- 12) Pérez Maricevich, *Breve antología del cuento paraguayo*.
- 13) Francisco E. Feito, *Op. cit.* 18.
- 14) Pérez Maricevich: *Op. cit.*, 9-15